

第4回糸島市総合計画審議会
第一分科会

日時：令和元年10月8日（火）

午後3時00分～

場所：庁議室他

（出席委員）

那須委員、古川委員、柚木委員、佐藤委員、中尾委員、邊委員

（欠席委員）

なし

- ・基本目標1「未来に輝く子どもを育むまちづくり」（4政策）
（事務局より資料に基づき説明）

部会長：

修正案等含めてご提案があったが、これについて忌憚なくご意見を頂きたい。おおよそ1つの項目について30分ずつくらい時間を取りたい。ご協力をお願いします。

委員：

「～するとともに」という文言がすごく多い。例えば3ページは「幼いころから芸術や文化を身近に感じられ」にするなど、順接の接続でいいのではないか。

事務局：

この文章は、「それにより～」ということではなく、「それと足して～」という感じで、表現は使い分けている。「取組」と「取り組み」の混在であったり、令和と西暦が混在したりするなどの構成は後ほど統一するが、あまりに分かりにくいということであれば、全体を通じて文章を考え直す。

委員：

「ともに」を使っていいところと、ここでなぜ「ともに」なのだろうと思うところがある。3ページの政策の方向性の1行目に、「体感・学習・参加」に加えて「参画」を入れていただきたい。参加とは、お客さんとして参加するようなイメージ。子どもが主体性を持って関わっていくという意味で、「参画」という言葉を追加したらどうか。一番下に「自己開発、自己実現につながるボランティア活動」とあるが、意味が分からなかった。大学でボランティア論を教えているが、ボランティアとは人の役に立つことが大前提で、自己実現や自己開発とは趣味の領域と一般的に言われている。これはどういった意図か。人の役に立つことを通して自己実現をするという意味か。エンパワーメントの領域と、サポートし合うという

ところを、生涯学習の領域として分けたほうが良いと思った。

事務局：

ボランティア活動を通じて、人の役に立つことをするというのは、自分の中での自己を実現していくという気持ちもあり、それによって、ボランティア活動を継続したり広がったりしていくのだろうということで、こういう言葉を使っている。

委員：

定義上は、自己実現だけだと、それは趣味だと言われている。自己実現につながるボランティアというと、違和感がある。

事務局：

こういう書き方だと趣味になるということか。

委員：

ボランティア活動の目的は自己実現ではないので、成立しない。結果として、自己実現が生まれてくるのであればいいが、自己実現につながるボランティアというと、それが目的化した印象を持ってしまう。大学生であればいいのだろうが、社会人は役に立つことが前提となる。

部会長：

例えば、委員であればどのように、ここを言葉として置き換えるか。

委員：

「自己開発、自己実現」も取って、「生涯にわたって学習できる環境を充実させ、ボランティア活動の活性化と人材育成」と、「自分も学ぶことで自己開発や自己実現ができる」の2つに、この項目の中で分けてはどうか。

部会長：

今ご提案があったように、2つに分けたほうがすっきりする気がする。

委員：

この項目は、切れ目なく、いろいろな市民の皆さんが関わり合いながら人が育っていくということであり、ボランティア活動の一部だと思う。「自己開発や自己実現につながるような活性化、人材育成を図ります」ということでボランティアを取って、必要であれば、もう1つボランティアの項目を作ったほうが良いという印象を受けた。

委員：

もしくは、「自己開発・自己実現やボランティア活動」としたほうが分かりやすいと思う。

部会長：

そこは少し整理していただきたい。今の政策（３）について、他にないか。

できれば政策を先に見て、１ページに戻る形でお願いしたい。

政策（１）についてはいかがか。

政策の方向性の１つ目、「保育所、幼稚園、認定こども園など、保育環境やサービスの充実を図っていくとともに」とあるが、保育あるいは幼児期の教育がサービスとして捉えられがちになっている。ある意味そうだが、逆にお金で買えるという認識が保護者の中に強まっていて、ひたすら預けっぱなしという状況も生まれてきている。

本来、親子関係を充実させるために、こういう施設を利用していただくことが前提であるはずなのに、むしろ親子関係が希薄になっているという指摘もある。そういう意味からすれば、「保育環境の充実を図っていく」でいいのではないかという気がしている。一番下に保育士・幼稚園教諭のワークライフバランスを入れていただいたのは、本当に大きな一歩だと思うが、保育というのは単なるサービスではないということを、今一度、我がまちにおいて発信していくことが非常に意味のあることではないかと思う。

政策（１）については、よろしいか。では、政策（２）についてはいかがか。

委員：

政策の方向性の１段落目、「教職員の育成、資質向上と働き方改革を推進します」を分けたらどうか。教職員の育成と資質向上は、重なる部分もあるが、別のような気がする。

部会長：

「教育に取り組んでいくとともに」を「教育に取り組んでいきます」ということか。

他はいかがか。

委員：

今の部分で、教職員のどういう資質を育成するのか、一言だけでもあるとイメージしやすい。

事務局：

子どもと教師の信頼関係ができることが必要だが、能力面、資質、心の部分などいろいろあるので、１つ挙げるのは難しい。

委員：

教職員の育成、資質の向上とだけ言われるとぼんやりし過ぎている。いろいろな分野があるということだけでも書いていると違うのではと感じた。

事務局：

「子どもと親と教師の信頼関係の基盤になる」などが。

委員：

1行目に「連携し、信頼関係を」のような文があったほうがいい。

部会長：

冒頭に「学校・家庭・地域が信頼関係を基に連携し」と入れるということか。

事務局：

私も基盤は信頼だと思っている。虐待にしてもいじめにしても、あらゆる課題の根底には信頼がないと健全な育成はできないと思う。

部会長：

信頼関係を育みながら連携していくという感じか。

委員：

昨今、本当に大事な気がする。あまり保護者が先生を信頼していない。

部会長：

「お互いに動きましょう」というニュアンスを含めたほうがいいかもしれない。

学校教育となると、制度的には幼稚園、幼児教育からとなるわけだが、幼児教育は今、保育所・認定こども園においても、3歳以上はある意味学校教育である。政策(2)にも「保育・学校教育の充実」ということで、生まれてからずっとこのまちでは学び続けられる環境の中で、子どもたちがいろいろな信頼関係を持った大人たちの中で育てられていく。そう考えると、もうそろそろ学校教育だけではなく、その前にある保育教育の世界とのつながりも、あえてここで打ち出したほうがいいのではないか。「ワンランク上の姿」の中にも、「学び続ける教職員による質の高い保育・学校教育」と、「保育」という言葉を入れたほうがいい。さらに、政策の方向性の1番目も、今は多くの子が保育所に通っているわけで、学校の前に「保育所」という文言を入れて、2行目は「能力を育むことができる教育」の前に「保育・教育に取り組んでいきます」と入れてはどうか。

もう1つが「教職員の育成」である。これは私も門外漢だが、保育所の場合、「教職員」という言い方をするのか。

委員：

「保育士」である。

部会長：

だとしたら、「保育職・教育職」ではどうか。小学校の場合、教職員に事務の方なども含まれるのか。

委員：

全部入る。

部会長：

であれば、保育職・教職員でもいいのかな。そこは要検討だと思う。この前も申し上げたように、乳幼児期からの教育ということが世界的な潮流としていわれている。ただ、乳児期の教育というのは、何も知的な面で刺激を与えてどうのこうのではなく、きちんとした信頼関係を元に、保護者と親子がしっかり関わることも教育なのだと、最良の教師は親であるということを経験して、ニュージーランドなど、国家戦略として、乳幼児期からのそういう意味での教育を振興している国もある。もうそろそろ、乳児期からのということもお互い意識したほうがいいのではないかと考えている。

他にいかがか。

委員：

2番目の に「特別な支援を要する」とあり、後に「県立の特別支援学校の整備」と入ってくるので特別支援学校の対象の方かと思うが、これには不登校などの方も入っているという認識でよろしいか。

事務局：

いわゆる特別支援学校に通う方だけではなく、各学校で特別支援学級があったり、確かに不登校も、中学校、小学校、地域によってかなり出てきている。市としても、不登校対応専門員を配置して不登校対応などもやっているが、教職員の働き方改革という意味でも、本来、先生たちが授業に集中できるためには、そういったところも充実させていく必要があるということで、こういう表現をしている。不登校・いじめなど、特別支援学校・学級に行っている子どもだけではないということ。通常学級の中にいる発達障害の子も含んでいるという捉え方である。

部会長：

今、国が示す学習指導要領、並びに教職課程を持っている大学のカリキュラムにおける特別な支援とは、まさに委員がおっしゃったことも含め、さらに外国人で日本語を話せない子どもたちも特別な支援を要する児童の対象である。障害だけではない使い方が「特別な支援を要する」という意味合いに、今回の改定で示されたので、そこは押さえておいたほうがいい。

だとしたら、県立特別支援学校の整備と限定するのではなく、「県立特別支援学校の整備をはじめとした」など、もう少し膨らませたほうが、より広く「特別な支援を要する」をカバーできるのではないか。

事務局：

「特別支援学校の整備をはじめ、特別な支援を要する児童生徒の」ということか。

部会長：

それはまさに、このまちの優先順位が出ていいと思う。ということは、県立特別支援学校が先に来れば、糸島はそれを先にやろうとしているというのが市民の方にも共有されるだろう。

事務局：

学校教育課の担当だが、今まで県立特別支援学校がなくて福岡市などに助けてもらっていたが、市民の皆様の思いを実現するために動き出している。各学校でそういう支援を要する子どもたち、生徒たちへの対応に、教育委員会としても力を入れていこうとしている。参考までに、しっかり市民の皆様に理解していただくために、「特別な支援を要する児童生徒」という文言こそ、下に注意書きを入れたほうがいいか。

部会長：

そうである。「特別な支援を要する児童生徒」となると、どうしても障害を持ったというイメージになってしまいがちとなる。

事務局：

外国人などの発想がなかったので、はっきりと障害のある方だけではないということを、用語説明に入れたほうがいいのかなと考えた。

部会長：

政策（３）について、先ほどいろいろ出ていた文言等の微調整は最終的にやることにする。

委員：

２ページの学校規模の適正化について、「小規模の校区において」と書いてあるが、学校規模適正化委員をしていた時に、適正化するのには小規模の校区だけではないと聞いた。

事務局：

担当課に確認する。

部会長：

１ページ目についてご意見を願います。

委員：

赤字で「しっかり発信しながら」とあるが、これで十分か。必要な人に必要な情報といっても、受け取り方は人それぞれで、「その人に合った方法」というニュアンスが欲しい。そこまでここに入れるべきか、考えている。

委員：

「発信」というより、「届ける」などのほうがいいかと思う。

委員：

受け取るほうの視点が含まれていい。

部会長：

発信しっぱなしになっていないかということか。「必要な人に必要な情報がしっかりと届けられるように」ということか。

委員：

「しっかり」は話し言葉のようになるので、要らない。

部会長：

「未来に輝く子どもを育むまちづくり」について、「未来に輝く子ども」よりは「未来で輝く子ども」という位置付けではないでしょうか。「今、我々が育もうとしている子どもは、未来社会に送る生きたメッセージである」と言った学者もいるが、「未来社会に送る輝く子どもを育む」とか、「未来社会で輝く子どもを育む」などいかがか。違和感はないか。未来社会においては、子どもは大人になっている。その時点で子どもとして輝くようなニュアンスに捉えられるのではないかと思った。人として未来社会で輝くために、子ども時代をいかに育てていくかという意味合いであれば、「未来社会に輝く人を育むまちづくり」なら分かる。

「まちづくりで大切にすること」でも、「人とつながり、地域とつながり」とあるが、子どもの育ちから言えば、順序を変えて、その後ろにある「よく遊び、よく学ぶ」が先にくるのではないか。また、「子ども」となると、多くの方々は小学生以上のことをイメージしがちな気がする。ここにも、あえて文頭に「乳幼児期より」と入れて、「乳幼児期より、よく遊び、よく学び、人とつながり、地域とつながり」という流れのほうが、我々の思いが伝わりやすいのではないか。

その下も、「子どもを安心して生み育てることができる……保育園等、学校が」とあるが、「保育所、学校などがそれぞれの役割を果たし」のほうがいいと思う。その次の段落の「生きる力」も、学校教育において非常に重要なキーワードになっているが、あまりにも言われ過ぎていて心をつかまれない。地域の祭りに参加して大人の世界を垣間見るなど、単なる表面的な生きる力ではなく、自分でその力をもって生き抜いていくという、サバイバル的な世の中になってきている気もするので、「生き抜いていく上で必要な資質・能力を育む学校教育、保育」、そういったものを推進しますくらいの宣言をして、我々も覚悟を決めたほうがいいと思った。

委員：

賛成。その根底に、たくましさがないと生き抜いていけないと思う。

部会長：

「健やかでたくましく、そして豊かな人間性」という辺りに「たくましさ」というキーワードを入れたほうがいいのかも。タフということ。

「未来に輝く子どもを育むまちづくり」についてはいかがか。「未来社会に送る」という言葉を使ってみるか。「子どもは、我々大人が見ることのない未来社会へ送る生きたメッセージである」と言った学者がいる。今の子どもたちがどういう生活をしているかによって、未来社会は既に形作られていってしまうと。ややチャレンジングな言葉ではある。

委員：

ワンランク上にふさわしい表現に感じる。

委員：

力強い感じになっていいと思う。

委員：

未来社会で活躍するということになる。

部会長：

では、そういう案として残してよろしいか。確かに「輝く」という言葉自体が、抽象的ではある。では、2つ目について説明をお願いします。

- ・基本目標2「人と人がつながり助け合うまちづくり」(3政策)
(事務局より資料に基づき説明)

部会長：

4ページ目の政策(1)から、ご意見ををお願いします。

委員：

「ワンランク上の姿」にある「地域」とは、行政区のことか。

事務局：

まちづくり基本条例の中では、行政区がいわゆる地域活動の最小単位で、その次に校区が自治を行う単位としている。「地域」の使い方としては、例えば行政区で活性化していかないといけないこともあれば、校区単位で伝統文化を守っていくなどの意味もある。

委員：

コミュニティは何になるのか。

事務局：

コミュニティの最小単位は、隣組などもあるが、基本は行政区・校区と捉えている。

委員：

では、「若者や女性など多様な地域の担い手」というのは、行政区の担い手という意味か。

事務局：

それもあるし、校区の担い手というところもあるかと思っている。

委員：

行政区と限定するのであれば、自治体の役員には若者と女性はあまりいないので入れてもいいのかなと思う。もっと広く取るのであれば、既に若者と女性でいろいろな活動をしている方がいるので、「若者と女性」が書かれていると、若者と女性は担い手でないようなイメージを受ける。「多様な地域の担い手」から始めてもいい。

委員：

行政区で若者というと、50代を指し、地域の話し合いのとき「若手が」というと、60代前半を指す。文言で「若者」というと青年のイメージなので、少し違うと思う。

部会長：

「若者や女性」を取ってしまったほうがいい。

事務局：

現実的には、若者の参加が少ない。

委員：

若者の定義が地域によって違うということ。

部会長：

「新たな担い手」という意味合いか。

委員：

実際、PTAなどは女の人がやっているし、女性が動いているので、語弊がある。

部会長：

「多様な地域の新たな担い手が育ち」と入れれば、皆さんの意見が通りそうか。

委員：

「ワンランク上の姿」で、「自立した地域コミュニティ」とあるが、自治をすることが自立ということか。

事務局：

まちづくりの3つの方向性で、自立度の高い糸島づくりということで、行政レベルでも地域レベルでも自立できるまちをやっていきたいと思いますということ。行政区や校区において、人口が減少しても持続可能な地域を運営していくために、今、コミュニティセンター化などもあって、ある程度、地域で収益事業のような活性化事業をやっていけるので、自分たちの地域は自分たちで運営していける状況をつくっていきましょうという意味合いで「自立」としている。

委員：

ほかの所の総合戦略や総合計画を見ていると、「住民自治」という言葉を使っているが、どちらの言葉のほうが糸島にはいいのか。

事務局：

住民自治は基本で、それを行政も含めて、国・県に頼り過ぎずに、糸島市として自立した行政運営、財政運営を行うという意味合いで、3つの方針の中にあえて「自立」を入れている。

委員：

「自ら解決する」と書いているので、わざわざ「自立」とまで書かなくてもいい。地域での「課題解決型のまちづくり」という言葉をメインにしているから、自立ではなく、地域の課題を解決すれば、それで地域は成り立つのではないかという話になる。

部会長：

「自立した」という言葉を取れば、「地域自ら地域課題の解決や地域活性化に取り組む地域コミュニティを目指す」となる。「自立」というのは、行政としての思いは伝わってくるが、各地域からすれば見離されるのではないかという気がする。

政策(2)はいかがか。

委員：

人口が減っていくのに持続可能なことをしろと言われても、無理というのが本音にある。

事務局：

ここに書いている「一定減少したとしても」というところは、地域の皆さんは、人口減少は一定仕方ないと思われている中でも、行政区、校区なり地域の取組みは継続していきたい、伝統文化を守っていきたいという気持ちを持たれているので、そういう機能を維持できる地域をつくっていく必要があるのではないかとということで、目指すべき「ワンランク上の姿」で書いている。

委員：

この文章を読むと、ずっとこの地域に住んでいる人たちを対象に書いている印象がある。一時的に住んでいる大学生や、近くから遊びに来ていたり、地域で生活している人たちが文章から読み取れない。その辺りを踏まえると、何か変わるのではないかと思う。

部会長：

新たな担い手になる可能性を有した人たちも地域にいるということ。

委員：

関係人口の拡大のところにも、「地域の人材や大学生」と入れてもいいのかなと思う。

事務局：

人口減少地域対策は、住んでいる人たちだけで解決できる問題ではなく、関係人口、来てくれる人、活動してくれる人、出て行った人が一時的に戻ってきて取り組むなど、いろいろなところでやらなければいけないところがある。特に、糸島市には九州大学があり、中村・西南大学とも連携しているので、大学生も地域に入ってという意味では入れるのはいいと思う。

部会長：

関係人口と言われても、恐らく多くの人にはピンと来ない。今おっしゃったように、そこを政策の方向性の中に、具体的に文言として示されるといいのではないか。

ほかはないようでしたら、政策（3）に移る。

委員：

前回指摘すべきだったかもしれないが、「ワンランク上の姿」の1行目の「国籍」というのはイメージが湧くが、「民族の違いなど」という言葉は一般的に使うのか。

事務局：

担当課に確認する。

委員：

私たちは使う。中国でも民族はたくさんいるし、同じ国でも民族が違ったり、イスラム教の人、キリスト教の人がいるので、そういった意味合いだと思う。

事務局：

宗教と民族は違う。

委員：

ただ、民族に宗教が付随していることは多い。

事務局：

では、これはこれでいいか。

部会長：

その後ろに「幸福な人生」もよく聞く言葉だが、「幸せな人生」ではどうか。なるべく分かりやすい言葉のほうがいい。

最終的に言い残したことはないか。

基本目標1の「未来に輝く子どもを育むまちづくり」は、当然、このあとの全体会でも触れないといけないところなので、「未来社会に送る輝く子ども」など、チャレンジングな言葉を提案してみて、ほかの部会の方々の反応によって検討させていただければと思う。

もう1つ、こちらのプリントに「重点課題と政策」という、最後の2行の「重点課題の子育て支援と、政策の子育て支援の違いが分かりにくい」とある。基本目標の2ページ目、政策(1)の「子育て支援の充実」もよく使われる言葉で、国の政策用語に間違いなく「子育て支援」という言葉はあるから自治体を使うのも当然の流れだが、子育て支援が充実すればするほど、一方で親子関係が希薄になっているという実態も指摘されている。むしろ、本来的な子育て支援の思いは、ここに書いてある子育て、親が親としてというか、その辺は専門的な立場から委員にご意見を頂きたい。本来の子育て支援とは何なのか、というのを問い直さなければならぬ時期に来ていると思う。だとしたら、むしろ「子育て・親育ち」をどう支援していくかのほうではないか。サービスという言葉に置き換わってしまっているので、そこに個人的にも危惧を持っている。「子育て支援の充実」を「子育て・親育ちの支援の充実」という言い方に変えたほうが、よりストレートに、こちらの思いが出やすいのではないかと思う。

今日も、分科会にご協力いただき感謝する。